大正大学と仏教研究[1)]

星　野　英　紀

1．大正大学の誕生と現在

大正大学は、仏教を建学の精神として天台宗、真言宗豊山派、真言宗智山派、浄土宗の日本仏教四宗派が設立している大学である。日本で複数宗派が共同して設立・運営しているのは大正大学だけである。セクト性が薄く寛容精神が優先するという日本仏教らしい大学ともいえる。

４宗派共同設立ということは、仏教研究および聖職者養成に大きなメリットがある。他宗派の教義や儀礼も学べること、他宗派の僧侶と親しい友人になれることなどである。

大正 15 年（1916）に大正大学は開校した。つまり、大正大学の「大正」は大正時代から取ったものである。「日本仏教総合大学」と名付ければ一層大学の性格が明瞭になったであろうと思うが、当時は大学の名前に特定の宗教の名を用いることは許されなかった。これはおもに、キリスト教の進出に対する国家の警戒感の表れであるとされている。

大正大学の創立の目的は、仏教研究の促進と仏教界の人材養成であった。創立まもない時代の大正大学には、数多くのすぐれた仏教関係の学者や学生が集まることになった。

さてここで、明治維新以降の日本仏教界および仏教研究の状況を少し考えてみよう。江戸時代末期から神仏分離および廃仏毀釈が行われて仏教は大きな打撃を受けた。江戸時代に仏教が持っていた特権的地位を奪われた。明治時代初めには仏教は近代化の障害であるかのように評価された。

さらに、明治仏教界とくに仏教研究に大きなインパクトを与えたことは、当時のヨーロッパにおける最新の仏教学が日本へ紹介されたことである。江戸時代までの仏教研究は、中国語に翻訳された仏教経典（漢訳経典）を原典としたものであった。明治になって西欧からサンスクリット文献やインド文献による仏教研究が導入された。これは日本の仏教研究を一新したともいえる。大げさにいえば、仏教研究は「一から出直し」となった。日本の仏教研究は、それまでの仏教学の再編成を迫られることになった。原典の再確認（例『大正新脩大蔵経』の編纂）、専門的な辞典の編纂（この講演で取り上げるような『梵和大辞典』や『仏教大辞典』の編纂）のような作業が行われた。大正大学の仏教研究もそうした動向に沿って展開していった。

昭和 50 年（1975）ごろまで、大正大学は基本的には僧侶養成と仏教研究を中心とする大学であった。しかしその後、大正大学はいわば“世俗化”した。日本における大学進学者が急激に伸びたことと、大学として聖職者養成教育以外の教育をすることが社会的責任になったこと、などが挙げられる。創立期から太平洋戦争終了時までの大正大学は文学部だけの大学であった。そのころは学生も先生もほとんどが僧職にある者あるいは僧職になる者であった。仏教学科、哲学科、宗教学科、史学科、文学科などがあった。教員も学生も仏教色が色濃かったわけで、研究内容、教育内容はどの学科も広い意味での仏教研究が中心であった。つまり仏教史研究、仏教文学研究、仏教思想研究、仏教の比較宗教学的研究などが盛んであった。学生数も総数 1000 人に満たないものであった。

現代の大正大学は 5000 人ほどの学生がいる。学部数は四つあり、仏教学部、人間学部、文学部、表現文化学部である。現在、仏教学部の学生数は全体の 10％ほどである。そのほかはほとんどが仏教研究とは関係の無い領域を学ぶ学生である。教員も仏教以外の研究や教育を行う教員の数のほうがずっと多くなっている。

現代日本の大学は、あえて大きく分けると、研究者養成の大学と学部生の教育中心の大学という二つの大学の種類に分かれつつある。現在の大正大学は経営的な必要性もあって、学部学生の教育に重点が置かれている。大学院の教育は一部では学生が十分集まらないところも出てきている。ただし仏教学の大学院は現在も大勢の学生が学んでいるが、やや文献学的な研究に偏っている向きも見られる。

2．本講で論ずること

この講演では、大正大学の歴史のなかで現在でも非常に高く評価されている優れた業績を上げた仏教研究者について触れていくことにする。ただし 90 年の歴史をまとめることはなかなか難しい。そこでつぎのような点を確認させていただく。

1）すべての研究を明らかにするのは不可能であるから、選択を行った。
2）優れた業績を残した研究者６名およびライシャワー博士とご縁の深い学者１名を論ずることにした。
3）論ずる学者は故人に限ることにする。ある程度評価が定まっているからである。
4）単に文献学的言語学的仏教研究者だけでなく、広義の仏教研究者をここでは取り上げる。
5）私個人の研究視点が宗教学であるから、意図せずして私の興味が反映されることは否定できない。
6）私は、ここで論ずる７人のうち３人にはその生前にお会いしている。ただし、そのうち２人は黙礼する程度の関係であり、あとの１人も専門が違っていたので、私自身が深い影響を受けたという方ではない。

とりあえず以上のようなことを前提として、以下の７人を論じていくことにしよう。ただし最後の勝野隆信はＥ・ライシャワー博士と格別のご縁があったということで、この講演の最後に論ずるすることとする。

荻原雲来（1869–1937　仏教学者）
望月信亨（1869–1948　仏教学者）
矢吹慶輝（1879–1939　宗教学者）
筑土鈴寛（1901–1947　国文者）
吉岡義豊（1916–1979　中国学者）
勝又俊教（1909–1994　仏教学者）
勝野隆信（1899–1969　日本仏教史学者）

これら７人に共通していることは、いずれも仏教を研究テーマにしており、いずれも僧侶であったという点である。なかには亡くなってからかなりの時間がたっている方や若くして亡くなった方もあり、その人物像などを再構成するには、資料や文献がなかなか入手しにくい。その結果、私のここでの紹介内容には人によって文章量の多寡が生じていることがある。

3．荻原雲来（1869–1937）

荻原雲来は、西日本の和歌山県で生まれ 10 歳で浄土宗の僧侶となった。その後、浄土宗僧侶養成機関である浄土宗学本校へ進んだ。僧侶として知識と経験をさらに積むためである。

彼は浄土宗第１回海外留学生に選ばれヨーロッパに行った。最新のヨーロッパ仏教学を学ぶためである。荻原が留学したのは、ドイツ（当時）のシュトラースブルク（フランス名ストラスブール）大学のエルンスト・ロイマン Ernst　Leumann（1859 ー 1931）教授のところであった。ロイマンのもとでサンスクリット、パーリ語の学修および原典研究を行った。Ｅ・ロイマンはスイス生まれであって、当時、マックス・ミュラーと双璧といわれたヨーロッパの代表的東洋学者であった。

荻原雲来は日本にいたときにすでに英語はマスターしており、留学後まもなくドイツ語も自由に操るようになった。日本出発に当たって自分の師僧から「持戒堅固であれ」とだけ言われたと伝えられているが、実際に荻原は大変な努力家、勉強家であり道徳堅固な日々を送った。下宿にいなければ大学図書館にいるといわれるほどであった。友人たちはかれを「菩薩」とか「君子」と呼んでいた。

彼の指導教授であったＥ・ロイマンは、英語およびドイツ語がよく出来た荻原雲来と極めて親密に交流し、互いに研究上大いに益するところがあった。荻原はＥ・ロイマンからインド原典研究の恩恵を受け、Ｅ・ロイマンは荻原雲来より漢訳経典関連の知識を得ることができた。当時のヨーロッパの仏教研究において、中国語など東アジアの言語に精通する者は極めてまれであった。荻原雲来のシュトラースブルク大学時代の親友は、二人の関係を評して「ロイマン教授が先生か、荻原君が先生かと惑わしむる様な師弟関係」といっている。（足立文太郎、134 頁）。両者は教師・教え子という関係よりも共同研究者という風情だったのであろう。学風、態度まで両者はよく似ていたという。

荻原のシュトラースブルク大学滞在は６年におよび帰国した。ただちに宗教大学（大正大学の前身）の教授に就任し、サンスクリット語、チベット語、パーリ語、ドイツ語の講義を始めた。さらに浄土宗関係の中学校、高等女学校の校長を兼任し、また浅草の浄土宗寺院の住職も務めた。大正大学の教授になってからは仏教サンスクリット原典研究を聖語学と名づけ、聖語学研究室を立ち上げた。彼の厳しい指導の下に多くの

サンスクリット学者が育っていくこととなった。

荻原雲来はまじめな学究肌の人間で「細より微に入り、細をきわめ」（常光浩然、294 頁）る研究方法で、真髄を究めるまでとことん研究し続けるというタイプだった。こと専門の学問についてであれば、先輩同輩といえども一歩も譲らぬ人であったという。彼の学問の真骨頂は厳密な文献研究にあった。彼は仏教サンスクリットでは世界的権威としての評を受けるまでになった。荻原雲来の多くの業績のなかでも、現代において大きな意義を持っているものは『漢訳対照梵和大辞典』である。当時の日本の仏教学界では、西欧のインド学の導入の影響で最新の成果を踏まえた辞典の編集が喫緊の課題であった。後述のように、望月信亨はすでに『仏教大辞典』の編纂に取りかかっていた。荻原雲来は親友望月信亨に大きな刺激を受けたと考えられている。

荻原の几帳面な性格、その博学ぶりは『漢訳対照梵和大辞典』の編纂にまことに適合しているといえるかもしれない。またＥ・ロイマン教授の学問方法もさらに辞典編集に適したものであった。ロイマン教授は、言語学上の立場から仏教サンスクリット語の個々の起源と変遷を説明するという手法を用いたが、荻原雲来はその手法の上に、漢訳仏教聖典、チベット語訳まで参照するという言語学的に高度な手法を編み出した。それが『梵漢対訳仏教辞典』を生み出す結果となった。その辞典は第２次世界大戦の影響もあって彼の生前に完成せず、東大教授辻直四郎らの協力を得て結局最終的に完成したのは 1978 年であった。いまでは、諸外国のサンスクリット・英語仏教辞典類も新たなものが編集されている。参考文献や出典の明記についても不十分なところがあるが、現代においても本書は日本随一の学術的サンスクリット・日本語辞典であり、何度も再版され、大正大学の仏教学研究や教育においても常に座右の書とされている。

彼の講義を受講する者はその厳しさから毎年ごく少数の学生であった。つまり年によっては、原典を間において荻原雲来一人に学生二人が向かい合うというような講義であった。学生にとってはまことに大変な講義であったが、教師と学生の間は極めて親密なものとなった。原典を間に教員と学生が対面的に座り一行一行を正確に読み進めるという講義スタイルは、いまも大正大学大学院のサンスクリット文献購読では続けられている。

４．望月信亨（1869-1948）

望月信亨は、大正大学教授から大正大学学長を歴任した著名な仏教学者である。浄土宗僧侶であり、浄土宗本校では先に述べた荻原雲来とは同級生であった。荻原雲来はサンスクリット学者であったが、望月は中国仏教、日本仏教研究を専門とする仏教学者であった（ちなみに日本では、仏教学といえば中国仏教、日本仏教研究を専門とする学領域を指し、その学者を仏教学者と限定的に指し示すことがある。その場合、インド仏教やチベット仏教研究をはインド哲学（印哲）とよび、中国仏教、日本仏教研究者とは区別する）。

望月信亨は福井県の農家の五男に生まれ、11 歳の時に浄土宗の寺で得度出家した。その後、浄土宗の僧侶養成機関である浄土宗本校に進んだ。さらに比叡山に内地留学して中国仏教、日本仏教の勉強を積み重ねた。望月は 30 歳で浄土宗本校の教員さらに 46 歳で宗教大学教授となる。さらに宗教大学が大正大学となるとそこの教授となり、1930 年の 61 歳の時に大正大学学長となる。1945 年の 76 歳の時に浄土宗管長となり、同時に総本山知恩院門跡となる。1947 年には、長年の仏教学研究貢献によって日本学士院（The Japan Academy）会員となる。しかし翌年の 1948 年 79 歳で遷化した。

このように望月は研究者として大正大学学長を経て最晩年には日本学士院会員に選出され、また僧侶としては浄土宗総本山知恩院門主に就任としたわけで、学僧としては頂点を極めた人物である。

望月には大乗仏教に関するかずかずのすぐれた業績がある。その主なるものを挙げるとつぎのようになる。『浄土教之研究』（1913）、『略述浄土教理史』（1921）、『大乗起信論之研究』（1922）、『浄土教の起源及発達』（1930）、『浄土教概論』（1940）、『中国浄土教理史』、『仏教経典成立史論』（1946））などである。

しかし望月を今日まで著名な仏教学者ならしめているのは、彼の編集した『仏教大辞典』全 10 巻である。通称モチブツ（「望仏」つまり望月氏編纂の仏教辞典の意味）と呼ばれ、長らく仏教研究を目指すすべての学徒の座右の辞典となってきた。望月は「学問一筋」の「努力の人」であったと彼の遺族が述べている。だからこそ全 10 巻の大辞典ができたのであろう。ただし彼の生前中に完成したのは第 5 巻までと別巻 1 巻であり、最終的に 10 巻が揃うのは、彼の没後十数年経過した 1963 年であった。

着手したのが 1906 年であったが、出版までの道の

りは決してスムーズではなかった。彼の言葉でいえば「悪戦苦闘 30 年」（初版の「自序」のなか）だった。

しかし出版された結果は多くの同学の士に万雷の拍手をもって迎えられた。この辞典の編集を代表とする彼の偉大な研究業績が高く評価され、1947 年 6 月には日本学士院会員に選ばれた。官学優先の日本において、私学出身で一貫して私学の教員として過ごした望月信亨が日本学士院会員に選ばれるということは前例の少ないことであったという。会員選出の報を聞いた時の望月の「喜びは文字に表すことのできないほどであった」という。

『望月仏教大辞典』はいまも仏教研究者の座右の必携書である。しかしあまりにも大部のものであり、かつ難解な表現も多く初学者には別にハンディな辞典が必要だということも確かである。

5．矢吹慶輝（1879–1939）

矢吹慶輝は、福島県伊達郡飯坂町に生まれた。6 歳のとき同県伊達郡の浄土宗寺院無能寺に養子入りし得度した。

1894 年、盛岡にあった浄土宗東北支校の尋常予備科に進学。卒業した矢吹慶輝は上京し浄土宗高等学院に入学した。高等学院時代には品行方正・成績優秀のために表彰状を授与されたこともあった。

高等学院を卒業した矢吹慶輝は東京帝国大学哲学科（宗教学）に入学した。卒業時には哲学科首席であった。卒業論文では姉崎正治を指導教授として「阿弥陀仏乃研究」を提出している。この論文は、加筆・修正が加えられ 1911 年に『阿弥陀仏乃研究』として刊行されている。これは信仰の書ではなく学問的に阿弥陀信仰の歴史的変遷を研究したものである。

1909 年大学卒業後、同大学大学院に入学する。1910 年に浄土宗立の宗教大学教授に就任した。1913 年、恩師姉崎正治がハーバード大学の客員教授として招聘されるに伴って、矢吹はその助手としてアメリカに渡る。引き続いて 1915 年、アメリカ在中時に浄土宗務所より海外留学生に任命され、欧米各国のキリスト教事情視察と社会制度調査を命じられる。アメリカからイギリスにわたった際、オックスフォード大学のオーレル・シュタイン

Aurel Stein、1862 ～ 1943）と出会い、シュタイン所蔵の敦煌文書を閲覧したことがきっかけで後に三階教研究を行うこととなる。

留学帰国後の矢吹慶輝は精力的な活動に入った。一方においては宗教学の研究者として、他方においては社会事業・社会問題の実践家として活躍した。1917 年帰国後、再び宗教大学教員となり、我が国初の社会事業研究室を開設し同室主任教授となった。1923 年の関東大震災のときには東京府臨時調査連絡部長に就任し、宗教大学社会事業研究室の学生を動員し救済活動を行なっている。この時期は、社会事業の理論的考察についても彼の関わりの深みが増している時期であった。

1923（大正 12）年『三階教の研究』を東京帝国大学に提出し学位を取得した。三階教とは中国古代の仏教の一宗派であり、僧俗一体を主張し徹底した布施行を行ったことでも有名である。矢吹は研究においても宗教の社会貢献的側面に関心を持っていたことがうかがえる。この研究業績は高く評価され後に出版され、1925 年に帝国学士院恩賜賞を授与された。

1924 年 1 月、東京帝国大学助教授に任命された。しかし翌年の 1925 年 5 月には東大助教授のポストを辞し、東京市社会局長となった。社会局長就任当初は大いに期待されていた矢吹であったが、局長としての成果はあまり振るわなかったようで、一年あまり経過した 1926 年 7 月に同職を辞し大正大学教授に戻っている。

大正大学における矢吹慶輝の活動は、社会事業家、社会実践家としての側面が強かったといえる。当時の大正大学付近には大規模な低所得者層の住宅が数多くあり、キリスト教団体の慈善活動なども極めてさかんであった。矢吹慶輝はその活動を通して、東京都など公共団体との関係も深くなったように思う。矢吹慶輝と福祉事業の繋がりはこの頃に膨らんだように思う。

一方、研究者として宗教学者としての矢吹慶輝については、その高い能力を賞賛する声は現代にも伝えられている。研究者としての矢吹慶輝と社会活動家との矢吹慶輝はどのように両立していたのか。

矢吹慶輝が東大助教授を辞して東京都の社会局長という役人職に突然転身したことはナゾが多い。矢吹慶輝の後輩であり戦後の東大宗教学科主任教授だった岸本英夫は後年、学者から役人へ転身した矢吹慶輝の動機を彼の生前にぜひ聞きたかったと述べている。

いまも転身の動機は明確ではないが、矢吹慶輝は一貫して宗教の社会的役割や社会貢献に強い関心があったのではなかったかと思う。最も高い評価を得た彼の研究業績は『三階教之研究』である。三階教は唐代中国の一仏教宗派である。三階教は仏教としてはかなり

ラディカルな一派であって僧俗一体の共同体的組織を作り、一種の富の再配分をした宗派で中国の唐時代にかなり弾圧をされている。三階教は社会活動を志向する宗派だったようである。つまり彼は研究上も社会的関わりが濃厚だった仏教に強い関心を有していた。矢吹慶輝においては、研究と社会実践は別々のものではなく共通の関心で繋がっていたのではないかと思う。

1910 年以降、矢吹は精力的に執筆活動をおこなった。彼の著書としては『阿弥陀仏乃研究』（丙午出版社 1911）、『近代思潮と仏教』（矢吹慶輝個人出版？1919）『三階教之研究』（岩波書店 1927）、『思想の動向と仏教』（大雄閣、1933）、『日本精神と日本仏教』（仏教聯合会 1934）、『現代人と仏教』（三省堂 1935）などであり、没後の出版としては、『思想と生活』（明治書院 1940）、『社会思想と信念』（明治書院 1940）『近代宗教思想論考』（明治書院 1944）などがある。ただし矢吹慶輝には社会事業、社会福祉関係の著作は一冊も無い。実践あるのみだったのか。

矢吹慶輝の社会事業への傾斜は、現在の日本仏教界への期待を考えると極めて示唆的であるといえないであろうか。仏教寺院が現代日本の問題、世界の問題についてより積極的な関わりを求める声は年々強まっている。

矢吹慶輝は、1939 年 6 月 10 日、三年前に発病した狭心症を再発させ死去した。矢吹慶輝の足跡を考え、また 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災のことを考えるとき、矢吹慶輝の社会事業、社会貢献への深い関心と行動は研究者である仏教者として学ぶところが多々あるのではないか、と考える。

6．勝又俊教（1909–1994）

勝又俊教は新潟県三島郡に誕生した。医学の道を志したが、生まれつき視力がやや弱かったために諦めた。若いときは野球、水泳などスポーツマンだった。東京帝国大学文学部インド哲学梵文学科に進み宇井伯壽に指導を受ける。

1942 年 4 月、大正大学講師に就任した。太平洋戦争後は、大正大学助教授、東洋大学文学部教授、東大文学部講師などを歴任した。1972 年、大正大学教授になった。1978 年、大正大学第 22 代学長に就任し、1984 年 9 月第 25 代真言宗豊山派管長（長谷寺第 79 代世化主）になった。

勝又俊教のもともとの専門領域は唯識思想である。その後、真言宗豊山派の伝統教学を学んだ。学位論文は『仏教における心識説の研究』である。この後に密教研究へと進んだ。

研究業績としては、『仏教における心識説の研究』（山喜房佛書林、1961）、『密教の日本的展開』（春秋社、1970）以外に代表業績として『弘法大師著作全集』全 3 巻（山喜房佛書林　1970 ～ 1973）が挙げられる。

この『著作全集』は弘法大師空海の主要著作を一行一行書き下（くだ）したものである。それまでの弘法大師全集は漢文のままであったが、現代人や初学者に近づきやすい空海の著作集の刊行を目指した。実際、この著作集はこれ以降の空海研究に欠かせない基本文献となっている。空海の著作は専門性が高く文章表現も多彩である。現代の読者がそれに近づきやすいようにするには、校訂者、編者側の膨大な仏教知識、漢文学全般への知識が必要である。その意味でインド学、中国仏教の研究から空海研究に至った勝又だからこそ出来た業績であるといえる。これ以外に『真言の教学』上・下（国書刊行会、1981 年）、『弘法大師の思想とその源流』（山喜房佛書林、1981）などがある。勝又俊教は近代仏教学の方法論と研究蓄積を土台にして、近代日本における密教研究の基盤を築いた一人といえる。

近代日本においてはプロテスタント的な合理的宗教観が優先されてきた。感情よりも理性、儀礼よりも教理が宗教の根源をなすという考え方である。その影響で、知識人層を中心に、宗教のあるべき姿としてはビリーフ（信仰内容）優先、プラクティス（儀礼や実践）は副次的という立場が有力になり、日本仏教研究では鎌倉仏教とくに浄土教や親鸞道元の、それも思想内容に対する研究が長い間尊重されてきた。それに対して、平安仏教や密教についてはその豊かな儀礼性、思想的深遠性が逆に呪術的、非近代的、非合理的なものであるとされ、仏教の流れとしては非正統的なものとして必要以上に排除されたり低い評価を受けてきた。

その後、1970 年ごろから過度の近代化への反省から「脱近代」そして「反近代」的価値への関心が強くなり、宗教現象の象徴性、儀礼性への関心が生まれてきた。これは日本だけに限らず先進国に広く生まれた状況であろう。こうして日本仏教研究においても密教や民俗宗教への関心が高まっていった。

インド仏教文献研究の方法をもって行われた勝又俊教の密教研究は『密教の日本的展開』として結実し、それまでの伝統的教学（宗学）ではない〝近代仏教学的〟密教研究が発展するための大きな貢献となったことは間違いない。こののちに述べる国文学者筑土鈴寛などへの関心が高まるのもほぼ同じ時期である。

現実には密教が日本仏教に占める位置は極めて高く、個人的な世界観や好みで密教を排除するとか注目するとかいう次元の問題ではない。黒田俊雄の顕密体制論も中世社会における政治史上における密教の重要性を説いていることはご承知の通りである。あるいは日本の仏教美術史を研究しようとするならば、密教の知識を欠くことはできない。比較宗教学的には「神秘主義としての密教」といったテーマも大変興味深いように思う。

日本における密教研究は、インド密教研究、チベット密教研究、真言密教研究、天台密教研究と幅広く関心を持たれている。研究機関としては代表的なものとして西日本の高野山大学と東日本の大正大学の二つがある。大正大学においては、古義真言宗と新義真言宗の二つの流れを踏まえているところが特徴であり、研究者の数、文献等も豊富である。さらに最近では、中世の密教研究も日本でかなり盛んになってきている。

7．筑土鈴寛（1901–1947）

筑土鈴寛は仏教文学研究者である。天台宗僧侶筑土鈴隆の長男として東京都下に生まれた。10 歳の時に一家離散という不幸に遇った。1917 年 16 歳のとき、上野寛永寺内現龍院の浦井亮玄の弟子となり、得度受戒した。その後､天台宗中学を経て國學院大学に入学、中世文学を専攻する。当時の國學院大學では国文学者折口信夫が教鞭をとっていて、その講義に大きな感銘を受け、以後の筑土鈴寛の学問に決定的な影響を与えた。この頃に東京上野の寛永寺内東漸院の住職を命ぜられる。

1928 年より大正大学で教鞭をとることとなり、それと同時に本格的な学究生活に入る。この頃から『国語と国文学』誌を中心に精力的に発表し続けることになる。

1938 年、彼は、自己の学問領域を確定するために『宗教文学』（河出書房）を刊行、次いで 1942 年、彼がもっとも尊敬した歌人であった中世の僧侶慈円を論じた『慈円　国家と歴史及文学』（三省堂）を著した。慈円（じえん）は平安末期から鎌倉期の僧であり歴史書『愚管抄』を著した。1942 年、それまでの主要な論文を集めた『復古と叙事詩　文学史の諸問題』（青磁社）を刊行する。そののち不運が彼を襲う。彼がライフ･ワークとして著述していた『中世文学史の研究』全 3 巻が、太平洋戦争の戦火にたびたび遭い資料とともに一切焼失してしまったのである。

戦後、民俗学者柳田国男や国文学者久松潜一たちの激励・援助によって新たな出発を決意したが、しかし病魔に襲われ亡くなった。享年 45 歳という若さでの死去であった。そのため彼の研究はほとんど未完成である。それにもかかわらず、彼の残した研究成果は戦後 20 年以上経過してから再評価されて著作集全 5 巻も出版された。ある学者はかれを評して、「異端の国文学者」であり「忘れられた民俗学者」であり「薄命の天才的学者の一人」あった」と賛美している。（小松和彦　305 ～ 6 頁）

筑土鈴寛が研究対象としたのは、中世の日本文学それも歌謡とか平家物語などに代表される語りもの文芸、唱導文学の世界であった。「安居院作神道集」の分析によって筑土鈴寛の名は学界から注目されることとなった。『安居院作神道集』は神社の縁起、由来、および祀られる仏神の物語を記したしたものである。それは神社の由来や伝説を記したものであり、神仏習合的な日本人の宗教観をよく表している。仏教が在来の神道を取り入れながら日本文化に根づいていった様子が良く分かるものであり、この書が中世以降の日本人特に民衆の宗教的世界観を形成するのに大きな役割を果たした、と筑土鈴寛は強調している。

『神道集』は、内容は荒唐無稽なことが多くまた文体もひどい和文臭の漢文体で、学術的には価値の低いものと見なされてきた。これを筑土鈴寛は近古文学研究の重要な資料として捉えた。当時主流であった実証主義的文献学的方法を厳密に守る立場からすれば、布教の道具として下級宗教者たちによって語られ伝承されてきた語り物、唱導文学は、低級な研究資料である。だから文献として信頼性がないとされてきた。それに対して、筑土鈴寛は柳田国男などの民俗学の手法と成果などにも注目して、語り物の世界の根底に潜む宗教的世界観、神仏関係などの研究の重要さを指摘した。文字化され評価の定まった文学そのものではなく、それの深層に潜む精神性や世界観の抽出に強い関心を持っていた。筑土鈴寛の言葉でいえば、「根源的な、原初的感情、神話時代からの〈共通の生命感情〉」の追求であり、「古今変わらぬ地盤として、その形象こそ異なれ、時所縁に応じて、出現するもの」の解明であった。（筑土鈴寛『中世芸文の研究』、有精堂、1966、37 頁）。客観的な実証的資料の範囲の学というよりも、後世の表現を用いれば解釈学とか現象学と言われた立場に近い。これは折口信夫からの影響であったし、またそれが多く無文字的伝承に頼る庶民

（常民）世界を研究する民俗学への筑土鈴寛の関心でもあった。ちなみに柳田国男も早い時期から『神道集』に注目している。民俗学そのものの成果が学的市民権を得るのは太平洋戦争後である。

逆に言えば筑土鈴寛が亡くなった後に彼が再度注目されてくるのは、日本国内でいえば民俗学が注目を浴びるようになった頃である。筑土鈴寛を再評価したもう一方の人びとは日本文化研究の人類学者たちであり、それはちょうど人類学において非歴史主義的分析手法が盛んになった時期つまり構造主義的人類学あるいは象徴人類学が盛んになったころでもある。日本で言えば、1960 年代後半以降である。『筑土鈴寛著作集』全 5 巻（せりか書房）が出版されるのは 1970 年代なかばから後半にかけてであるし、その編集の中心になったのは人類学者たちであった。

彼の文章は難解であるともいわれる。そして引用文献が明記されていないなどの欠点もある。これは明治、大正、昭和前期の学者には決して珍しくないことではある。しかしその文章は師匠折口信夫ゆずりのインスピレーションに満ちていると評価されている。（永井義憲、549 頁）

8．吉岡義豊（1916–1979）

大正大学が生んだ有名な道教学者に吉岡義豊がいる。吉岡の研究は、日本国内（もしかしたら大正大学内部）よりも海外の研究者から高い評価を受けていたのかも知れない。これについては私の昔の経験もある。いまから 40 年ほど前にアメリカのシカゴ大学に留学したとき、私が「大正大学の出身だ」と話したら、あるアメリカ人学者が「ヨシオカを知っているか、彼は世界的な道教学者だよ」と言ったのを良く憶えている。ちなみに私は晩年の吉岡義豊を知っている。しかし彼は中国学研究コースの所属教員で、私のフィールドと異なっていたので彼の講義を聴いたことはない。彼は大学院の講義中に脳内出血で倒れ一週間ほどで死去したのである。

吉岡義豊は高知県の山間部にある集落で生まれた。少年の時に、近くの真言宗寺院住職の弟子となり吉岡義豊となった。その後、東京の僧侶養成の学校に入り卒業し、1939 年、外務省留学生（文化事業部第三種補給生）に採用され北京に留学する。その時の研究課題は「道仏二教習合の情況」であった。その時の指導教授が常磐大定であった。常磐大定もまた僧侶であったが、中国仏教を専攻して各地の史蹟を調査していた。吉岡は中国滞在中に何冊か書物を出版するが、最初の著書は『道教小志』（1940 年）で道教の概説書である。発行元は日本軍関係であった。日本軍は戦争と占領政策のために中国文化を知る必要があり、その要請の中で吉岡義豊は道教を担当した。もちろん吉岡義豊はこの本を純粋に学術的に書いている。

以降、吉岡は、華北（中国中北部）の道教史蹟や民間信仰の調査に従事することになる。また北京の白雲観に入り道士と共に生活をして、道教の実態をつぶさに調査した。白雲観は道教の一派である全真教の道観（寺院）で、いわば総本山のような位置にあった。この調査研究は後に吉岡義豊の名を高らしめることになった。

しかし吉岡は太平洋戦争終了まで中国にとどまったため、敗戦直後に中国から引き上げる際に現地で収集した資料や執筆した原稿をすべて失うという気の毒な経験をし、ようやく帰国する。1947 年に大正大学の教員となる。その後も出版活動や学会活動を精力的に行っていたが、1979 年に大学院の講義中に突然倒れそのまま緊急入院し惜しまれつつ没っした。

日本では近代以前においても、中国思想として仏教、儒教、道教の三教を関連して研究するという立場は決して珍しいことではなかった。しかしそれは主に思想的研究であった。

日本文化には儒教、道教の影響が広く大きく見られるが、しかし日本では儒教と道教を宗教としてみる立場はあまり発展しなかった。つまり日本には儒教寺院もほとんど無いしまた道教寺院（道観）もなく、それゆえ宗教者としての儒者もなくまた道士もいなかった。ここからも日本での儒教と道教への長い関心は、その儀礼や教団ではなく思想であった。

しかし実際の儒教や道教は中国において思想的側面だけではない。特に道教においては極めて多彩で複雑な儀礼が行われており、またそれが中国人の日常生活に根強い力を持っている。

太平洋戦争以前の中国で吉岡義豊が注目したのは民衆のなかに生きた道教であった。だから彼は道教寺院に住み込んで調査を行うというような学的活動をしたのである。

彼のこうした活動を推進したのは当時の日本政府の植民地政策である。日本政府は、アジア諸国の植民地化を推進するために対象地域や民族の文化、社会の研究に積極的に研究費を提供した。吉岡義豊が外務省留学生になったのは 1939 年であり、そのような国家方

針の一環であったと言ってよい。

皮肉にも、この時代には日本のアジア研究の成果が大いに上がった時期である。それゆえ吉岡義豊の道教研究もまさにそうした植民地政策の副産物とである。当時はそうした研究がかずかず行われた。宗教や信仰習俗の研究も盛んであった。それには次のような研究が代表的なものである。赤松智城・秋葉隆『朝鮮巫俗の研究』上・下（1937 ～ 8）、宇野円空『マライシアに於ける稲米儀礼』（1942）、大川周明『回教概論』（1944）などである。

これらはコロニアル・スタディ以外の何者でもない。その意味では否定的評価を下されている。しかし、赤松智城、宇野円空、大川周明の業績そのものは貴重な研究や資料も含まれているということになり、宇野円空、大川周明の著作は過去 10 年ぐらいの間に復刊されている。

実は吉岡義豊の戦前の調査についても、〝ポスト・コロニアル理論〟が盛んになる前から評価されてきた。それは中国研究の特殊性にも原因がある。吉岡義豊は道観に住み込んで、文献に頼る道教研究ではなく民衆のなかに実際に生きる道教をつぶさに研究してきた。中国から帰国する際に資料や原稿を失ったとはいえ、それ以前に刊行した道教関係書物もあるし、戦後の吉岡義豊の業績も現地調査を踏まえた道教研究ばかりである。

吉岡義豊が道観に住み込んで目の当たりにした道教はまさに民衆の中に生きた道教である。研究者はこれを民衆道教とよび、前者の道士による道教を成立道教と呼んでいる。両者は相互に関連しているものであることは言うまでもないが、機能的にも形態的にも区分して考えることができる。

こうした民衆道教への関心と調査は、吉岡義豊の調査のように人類学でいうインテンシブ（intensive）な方法をとることによって豊富な結果を得ることができる。ところがこのようなシンテンシブな調査方法は、戦後中国では実施が極めて困難になっている。とくに外国人研究者にとっては不可能に近い。中国占領時代に道観に住み込みながら道教を研究した日本人は吉岡義豊だけでないが、極めて数少ない。少なくとも日本において成立道教と民衆道教の区別を主張した学者のひとりであり、彼の調査報告は日本のみならず外国でも評価されたのである。

こうした新しい視点と視点を持って戦後日本の道教研究のリーダーの一人であったし、日本道教学会創立の主要メンバーの一人であった。

9．勝野隆信（かつの りゅうしん）

いままで 6 人の大正大学仏教研究のすぐれた研究者を紹介してきた。さらにここで今一人勝野隆信（1899 ～ 1969）の名前を挙げることにする。彼の略歴はおおよそ次のようである。勝野隆信は天台宗の僧侶であり、長らく東京大学史料編纂所に勤務した。東大定年後に大正大学教授として約 10 年間教鞭を執った。著書としては『伝教大師』（1936）、『僧兵』（1955）、『比叡山と高野山』（1959）などがある。彼の専門は日本中世史であり日本仏教史であった。厳密な文献学者という定評があったという。

この講演で勝野隆信を取り上げた理由は、大正大学の学術研究への貢献というよりも、エドウィン・ライシャワー博士と勝野隆信との縁に触れたいということからである。彼はＥ・ライシャワーの学位論文作成に大いに関係している。それは勝野隆信の日記につぎのように書かれていることから良くわかる。（勝野家遺族の提供）

昭和 10 年（1935）10 月 7 日（月）
「辻（辻善之助のこと）所長より米国ハーバード大学研究生ライシャワー氏を紹介ありて、氏の研究題目たる慈覚大師の「入唐求法巡礼行記」研究につき助力をとの事にて承諾、水曜日の午後 4 時より 2 時間位の約在り。今週よりはじむ事とす」
昭和 10 年 10 月 9 日（水）
「ライシャワー氏 4 時より 6 時まで巡礼記講、来週より大師伝を講ずる事となる。一緒に帰途、同氏西荻窪下車」
昭和 10 年 12 月 11 日（水）
「4 時よりライシャワー君例の如し。「懇願の至りに任（た）へず」の一句を説明を重ねて、終に十分なる了解は得られざるものの如し。
「三界唯一心」の説明よりもはるかに難しかりしこと、日本人としては一寸不可解に思わるなり。新宿まで一緒に帰る」
昭和 11 年 1 月 29 日（水）
「ライシャワー氏今年最初なり。いまだ風（風邪？）いえず。慈覚大師伝を終る。来週より巡礼記に入らんとす。共に電車」

この文からすると、Ｅ・ライシャワーは勝野の指導のもと、テキストを少しずつ読んでいたような様子である。テキストは、慈覚大師円仁の漢文で書かれた日

記だったであろう。漢文といっても日本人の書いた漢文つまり日本式漢文であり、また難解な仏教語が数多くあり、当時の漢文に通じている者でかつ仏教語を理解できる日本人の個人教授が、E・ライシャワーに必要だったのである。そこで僧侶で文献学者の勝野隆信に白羽の矢が立ったのだと思われる。

E・ライシャワーの『ライシャワー自伝』自伝および『円仁　唐代中国への旅』（日本語翻訳）には、E・ライシャワーによる丁寧な謝辞が記されている。

勝野氏の葬儀にはライシャワー夫人も参列されたということで、その時にはE・ライシャワーの弔文も参列者全員に配布されたようである。

それが以下の小文である。（英語原文は発見できなかった）

謹んで御悔み申上げます。
私はご主人様が８カ月の入院のかいもなく御逝去された事を深く悲しみ哀悼の意を表します。
御存知の様に、私との友情は1935年、1936年の私のハーバード大学からの留学生として東京大学に来た時、史料編纂所へ勤務の御主人様に慈覚大師に就いて教えて頂いた事に始ります。卒業論文に選んだ慈覚大師の研究のスタートに、御主人様は親切で好意的であった事は今でも決して忘れる事は出来ません。そして私に仏教と古代日本史をよく噛みくだいて指導して下さいました。私の慈覚大師の日本語版が出来上がった時、御主人様の絶大な御援助のもとに研究した本の１冊の出版祝の席に御出席下さって、再び23年目にお会い出来た時は本当に嬉しいことでした。この近年お逢いする機会がありませんでした事は残念です。
私は御主人様の御逝去に深く深く御同情申し上げます。そして私がどんなに仏教学者として又、日本史学者として尊敬していたかを心から知りました。私の理解が少しでも貴女のお慰みになる事を願っています。
４月13日の御本葬に対して深く哀悼の意を表します。
どうぞ御家族の皆様によろしくお願いします。
1969年３月24日
エドウイン・ライシャワー
（前米国駐米大使）

E・ライシャワーのように日本と極めて近い関係にあった方の場合、いまでも日本の各地にライシャワーとご縁を持っている日本人がたくさんいるのであろうと思うが、大正大学もまたE・ライシャワーのアカデミックキャリアと深い縁を持った方がいたということはまことにうれしいことであるし、これこそご縁というものであろう。

以上７人の研究者以外にも後世に大きな影響を持った人々がいる。たとえば『大正新脩大蔵経』編纂の立役者であった渡邊海旭（1872～1933）、近代日本仏教界のリーダー役であった椎尾弁匡（1876～1971）がいる。この二人の足跡はここで取り上げた７人に勝るとも劣らない。都合によりここでは論ずることができず、いずれ別の機会に譲りたい。

10. エピローグ
―今後の実りある展開に向けて

以上を持って私の拙い話を終わりにさせていただきたいと思うが、最後に一言申し添えておきたい。

先進国はどこも似たような傾向かと思うが、現代日本においては国家の最重要施策は科学技術の推進であり、莫大な費用が科学技術文明促進へ投入されている。そのことは、必然的に人文学への財政上の補助が減少ないし停滞するという結果となって現れている。これからも日本の人文学研究は極めて厳しい道をたどるのではないかと思う。当然仏教研究も同様である。

このような困難な状況もあるが、大正大学としてはハーバード大学とこうした提携を通して、多くの刺激をいただき、優れた先学の業績と伝統を継承し、こうした機会を通じて次世代の研究者養成のきっかけにしたいと願っている。今後の実りある関係を築くことを真に要望する次第である。

具体的には研究者の交流ということであろうかと思う。先に紹介した先学たちの専攻したサンスクリット学、仏教学、真言学、仏教史学、宗教学、仏教文学については、現在の大正大学においても教員、研究生、大学院生がおり、その伝統は基本的に継承されてきている。仏教研究においては、浄土教研究、天台仏教研究も同じようにスタッフが揃っている。先にも申し上げた通り、４宗派がかかわっているので、大正大学の仏教研究は多彩である。大正大学では天台仏教、真言仏教、浄土教を学ぶことができるが、東京には日蓮仏教研究のメッカである立正大学、禅学研究で著名な駒澤大学がある。大正大学、立正大学、駒澤大学は仏教研究を通じて緊密な関係にあり、日本仏教の全領域を学ぶことができる体制となっている。

すでに研究者として一人前になった方々を相互に受け入れることは当然であるが、若い研究者たとえばポ

スドク（postdoctoral fellow）およびドクターキャンディデート（doctor candidate ）を研究生として受け入れ、必要な指導を行うことには何の問題もない。希望する講義を聴講することももちろんできる。その場合は、綜合仏教研究所の研究生ということがもっとも都合のいい方法であろう。この status　でいままでも数多くの外国人が大正大学に滞在している。海外からの留学生受け入れの施設（dormitory　など）は残念ながら整っていない。しかし home stay などの便宜は十分図ることができる。もちろん研究者であることを念頭にいれた home stay である。

もちろんライシャワー研究所と大正大学の研究者間では、お互いの特徴をよく理解しあうことも必要である。その一つは、宗教研究に関する両者間の視点の違いである。少なくとも私の理解するところ、アメリカの宗教研究は大きな枠組みを設定し、研究対象に対する全体的な特徴の把握という点を極めて重要視する。それに対して日本の研究者は全体像（英語でいえば generalization）の把握に関心が無いとは言わないが、むしろ細かい個別性にこだわる傾向があるように思う。この違いはもちろん相互に補足的な特徴であるが、時々、誤解のもとになることがあるように思う。この点は克服できないことではもちろん無い。ただし、双方が最初からその違いを認識して相互交流することが実り多い結果を得ることになるのではないかと考えている。

〈荻原雲来に関する参考文献〉

足立文太郎「ストラスブルグ時代の荻原裙」、荻原博士記念会編『独余雲来師余影』1938 年　荻原博士記念会所収

荻原雲来記念会　『荻原雲来文集』荻原博士記念会、1938

常光浩然「荻原雲来」、『明治の仏教者』下、春秋社、1969

西村実則　『荻原雲来と渡辺海旭－ドイツインド学と近代日本』大法輪閣　2012

〈望月信亨に関する参考文献〉

小澤　憲珠「望月信亨先生」　星野英紀編『大正大学回顧と展望』　大正大学出版会、2010 年、211 ～ 230 頁

金山正好、香月乗光編『望無雲遺芳』　望月博士記念会　1950 年

望月信亨先生三十三回忌追悼会編『恩師望月信亨先生』　山喜房佛書林　1980 年

〈矢吹慶輝に関する参考文献〉

江島　尚俊　「近代社会と仏教―矢吹慶輝を中心として―」『近代仏教』14 号　2007

芹川　博通　『社会的仏教の研究ー矢吹慶輝とその周辺』　文化書院　1988

〈勝又俊教に関する参考文献〉

松崎恵水　1995　「巨星　勝又俊教先生を慕う」（『大正大学学報』70 号、47 ～ 50 頁）。

榊義孝「勝又俊教先生」（星野英紀編著『大正大学回顧と展望』大正大学出版会、 2010 年　335 ～ 351 頁）

〈筑土鈴寛に関する参考文献〉

小松和彦　「筑土鈴寛の民俗学ー異端の民俗学」　同著『神々の精神史』　講談社学術文庫、1997 年所収

永井義憲「後記」、筑土鈴寛『中世藝文の研究』有精堂、1966 年所収

〈吉岡義豊に関する参考文献〉

大澤　広嗣　2010　「第二次世界大戦前後の大正大学関係者のアジア研究ー戦前・戦中を中心にー」、星野英紀編　2010『大正大学　回顧と展望』大正大学出版会、2010 所収、71 ～ 96 頁）

〈勝野隆信に関する参考文献〉

田村完誓「訳者あとがき」（Ｅ．O.　ライシャワー著、田村完誓訳『世界史上の圓仁ー唐代中国への旅ー』、実業之日本社、1963 年、282 ～ 302 頁所収）

ライシャワー、Ｅ．O.　著、田村完誓訳『世界史上の圓仁ー唐代中国への旅ー』（原題は Ennin's Travels in T'ang China , 1955 ）実業之日本社、

ライシャワー、Ｅ．O.　著、徳岡孝夫訳『ライシャワー自伝』（原題は My Life Between Japan and America 1986）、文藝春秋社、1987 年

註

1）本稿は、2012 年 4 月 24 日に、ボストンのハーバード大学ライシャワー研究所における講演原稿であ

る。2011 年に同研究所のヘレン・ハーデカ教授を通じて、仏教研究の相互交流を主旨とする大正大学との協定締結に関する申し出があり、同年中に大正大学とライシャワー研究所間に協定が締結した。その後、ヘレン・ハーデカ教授より私に同研究所にて、大正大学の仏教研究の伝統について講演してほしい旨のお誘いがあり、ここに掲載した論文を発表した。当日は、同研究所および近隣大学の日本学関係の研究者も合わせて約 30 人ほどが集まり、約 60 分の講演に加え、60 分ほどの質疑応答が和やかな雰囲気のなかで行われた。私自身にとっても極めて貴重な機会であったことは申すまでもない。ここに、こうした貴重な機会をセッティングして下さったハーバード大学ライシャワー研究所のすべてのスタッフの方々、同大学イェンチン研究所および図書館の方々に心からの謝意を表したい。本紀要に掲載するに当たっては、より学術論文形式のものにすることも考えたが、元々がプレゼンテーションであるので、そのままの形でここに発表することにした。外国人を対象としたプレゼンテーションであったため、日本人にとってみればいささか不要な語句が見られるかもしれないが、その点はご寛恕をお願いする次第である。